令和5年4月28日（金）東奥日報（1面）

リンゴ農家の肩守れ

腕上げる作業で筋肉損傷 対策探る

弘大 大規模調査へ 全農県本部支援

弘前大学は、今年の岩木健康増進プロジェクト（岩木健診）で、リンゴ農家に多い肩のけが「肩腱板損傷」の大規模調査に取り組む。県内のリンゴ農家を応援しようと、全農県本部が研究費を支援し、結果を基にした農家への啓発活動などでも協力する。（伊藤ほなみ）

【写真右】腕を上げてリンゴを収穫するリンゴ農家。頭上での作業が多く肩に負担がかかる＝2022年秋

【写真左】大規模調査で協力する弘前大学と全農県本部の関係者。左から石橋教授、中路重之医学研究科特任教授、桑田県本部長、笹森俊充副本部長＝27日

調査では、従来の岩木健診の約3千項目に、肩のMRI検査を加え、肩腱板損傷を患っている人の割合や喫煙など生活習慣との関連を探る。300～400人分のデータを集めることを目指している。

肩腱板は、腕を上げるときなどに使う筋肉で、四つの筋肉がつながって板状になっている。リンゴ農家は、剪定や収穫などで腕を上げて作業する時間が長く、重い物の持ち運びも多いためこの筋肉が傷みやすく、肩腱板損傷になる人が多い。症状は、痛みから始まり、放っておくと肩が動かせなくなることもある。

岩木健診は2005年に始まったプロジェクト。年に1度、弘前市岩木地区の住民約千人を対象に、全身の健康状態を詳しく調べ、集まったデータを研究や企業の商品開発に役立てている。今年は、6月上旬からの10日間で実施する予定。

MRI検査は多くの費用がかかり、これまで肩腱板に関する大規模調査は行っていなかった。今回は、全農県本部からの支援金を研究費の一部に充てて実施する。年配の人に多いけがのため、40歳以上の希望者を対象に検査する。終了後、患っている人の割合や職業との関連を調べ、農協広報誌などで農家に情報発信する。将来的には、血液検査などの情報も含めて分析し、予防や治療に役立てる。

27日、同市の弘前大学医学部健康未来イノベーションセンターで支援金の贈呈式を開催。同大大学院医学研究科整形外科学講座の石橋恭之教授は「リンゴ農家なら肩が痛いのは当たり前と思っている方も多い。ほったらかしにして治せなくなってしまう前に治療ができるよう啓発し、肩腱板で苦しむ人をなくせたら」、全農県本部の桑田徳文県本部長は「高齢化や担い手不足が大きな問題となる中、生産者を健康面でもサポートできれば」と話した。